

## 世界における中国の位置づけに関する分析

刘成 (Liu Cheng)

南京大学

\*\*\*\*\*

刘成は南京大学歴史学部の教授である。近代史の研究と教育に加え、彼は中国の大学に平和研究を導入した先駆者の一人である。2003年に彼はコヴェントリー大学平和・和解研究センターに客員研究員として在籍した。また2005年、11年、12年に中国で平和研究の国際学会を主催した。近年、彼はヨハン・ガルトゥング、アンドリュー・リグビー、デヴィッド・バラシュ、チャールズ・ウィーベルの著作を翻訳した。

\*\*\*\*\*

中国は、世界情勢の中でのライジング・パワーとしての役割を果たすべきである。だが、その適切な役割とは何か。中国が「追従者」になるということ、われわれ自身が決定できることではない。しかし、だからといって、「挑戦者」になるということが必要なのではないし、可能でもない（少なくとも短期的には）。では、中国にとっての正しい選択とは何か。それは、既存の概念によって簡単に定義され得るものではない。現在の国際政治的および国際経済的秩序が、先進諸国に都合の良い原則によって成立していることは疑う余地がない。それは、平和学が抗する対象の一つであろう。これらの原則が、ある一定、現代世界における正義というものを包含しているということもまた疑う余地はない。だから、中国が現在の国際的行動規範を維持するという目標を掲げることが、より賢い選択であり、それが生き残りの可能性につながると考える。そのような役割を引き受けることを適切に表現するとすれば、それは「維持者」となることであろう。その意味するところは、中国は、追従者でもなく挑戦者でもなく、その目標は現在の世界秩序を維持することである。われわれは、先進諸国によって確立された、現在の世界秩序と経済システムにおける正当性を検討するものではない。なぜなら、中国が、超大国が自身によって設定した原則を軽視すること、及び、現在しばしば非難されるようにダブルスタンダードを保持すること等を防ぐことによって、中国が狙っていることは、これらの原則に沿って行動することによって当然の対価を得ることであるからである。この維持者となるということは、世界的覇権との戦いを伴う。しかし、ここでは、戦いは正当化され、穏やかであろう。なぜならば、中国は新しいスタンダードを確立しようとするのではなく、認知されてきた原則に従って行動することを、すべての国（超大国を含む）に要求するだけであるからだ。そのような役割を果たすことは、中国の自身の利益を効果的に保護するだけでなく、大部分の国家の承認を得るであろう。

中国が維持者の役割を引き受けるならば、超大国の不合理な行動を制限するだけでなく、平和愛好国家としてアピールし、国際社会の支持を得ることになるかもしれない。そして、中国に対する不安をもつ国のいくらかは、その意見を徐々に変えるかもしれない。

したがって、維持者であることは、国際事象に対処するにあたり、中国にとってのベストな選択であるだけでなく、中国の国益にとって最も有益な戦略的決定である。しかし、本当に強くなった暁に、中国は、維持者であるだけで満足するのだろうか？長期的に国益

というものを考察した場合、中国は決して覇権を追求せず、超大国になってはならない、と私は考える。われわれの経験から、以下のことが言えるであろう。それは、世界中の帝国はそれ自身のために、政治的、そして経済的に大きな利益を得たにもかかわらず、それ自身の意志にしたがって世界秩序を確立し維持したすべての世界的な帝国は、如何に強力であったとしても、例外なく、歴史の舞台から消滅していったということである。その理由は、世界秩序を確率・維持するためのコストを徐々に支払いきれなくなったからである。このことは、西洋の学界で認識されている事実である。いわば、超大国とは、没落を意味するのである。それゆえに、21世紀には、たとえ十分に強力であったとしても、中国は超大国になる道を選ばず、新しい世界秩序を確立しようとしてはいけないのである。もし、超大国になろうとすれば、それはあらゆる局面において中国に災難をもたらすであろう。しかし実のところ、世界の発展の傾向から判断して、今後、世界秩序が超大国によって支配されることはないだろう。世界は多元主義の方へ向かって発展している。そして、いくつかの最強国及び強国が、世界情勢においてますます多くの重要な役割を演じることになるだろう。だから、維持者としての中国の役割は、否定的であるというよりはむしろ肯定的である。なぜなら、世界劇場における不合理な行動に対して、中国による建設的アドバイスが必要とされているからである。その際、中国は、超大国や他の力ある国や力の集合体等と衝突しないことが重要である。中国と他の国がしなければならないことは、平等に基づいて一緒に相談し、国際社会で認められた原則を共に維持することを学ぶことである。加えて、超大国は必然的に他のすべての国々の敵国となり、ありとあらゆる挑戦者と対決せねばならないということも、歴史的経験が示してきた。このように、中国は、超大国になるという愚かな選択を、常に避けようとしなければならない。

冷戦後の時代の国際的な状況は、以前の国際的な状況と接続していないわけではないが、ある変化については否定できない。それは、イデオロギーというものが弱体化しているということ、そして、現在、国々が経済発展とそれによる実際的利益に対して、より多くの注意を払っていることである。そのような傾向が強まれば、超大国が他国にそれ自身の意志に従って行動することを強制することができた時代は、永遠に消滅するであろう。そして、協力こそが新しい国際規範となるのである。異なる国々への協力と相互依存は、歴史において必要な傾向である。協力が相互利益をもたらすのに比べ、衝突は相互苦痛につながるだけである。一部の人々がまだ冷戦の概念に固執して、それに沿った方針を展開しようとするが、そのような意見は忘れ去られる運命にあるのだ。

実のところ、中国の伝統には豊かな平和的思想が存在する。孔子（儒教の創始者）による行為の基本原則として、儒教における中道とは、「仁」の「礼」との調和的統合である。人々間の関係を扱い、実直な人としてふるまうための最高標準としての「仁」の本質とは、他者を愛することである。他方、「礼」とは、人のふるまいの外側の規範として機能する。孔子の教義には、アリストテレスの哲学と何らかの類似がある。それは、中道を通して合理性と感受性の間を調整することの重要性を理解することにある。道徳的な平和の理想は儒教において主唱される。すなわち、キリスト教によって提唱される正義の戦争の代わりに、道徳的手段を通して人間関係と国事に関する紛争を調停するのである。孔子は、「道徳によって他者を納得させる」ために理想を提案した中国の最初の予言者である。それが、後に、論争に対処する儒教の基盤となる。その理想とは、国を統治するための軍隊や刑法のような暴力的メカニズムに代わるほどの、政治における巨大な力を示しだすことになったのである。一方、道教では、妥協の平和思考が宣言される。平和学の創始者、ヨ

ハン・ガルトゥングが次のように述べている。「平和と暴力についての思想は、道教において共存する。それは、安全の中にいる間に、危険への準備をするようにと、人々に対し警告するのである。」彼は、平和学が、医学と同じように実際的な科学であること、そして、中国の伝統的医療がその優れた例である、と特に強調する。したがって、彼の平和学においては、陰陽の関係性におけるバランスの良し悪しの原則が用いられる。これらのことから、相対的な外交政策を立てる際に、中国の平和学が、建設的アドバイスを中国政府に提供することを、私は期待する。それは、人々を平和というものの価値をより高く評価するように啓蒙し、中国の平和ならびに世界の平和に貢献するように、中国の伝統的な平和思想を強化・深化し、人々を昇進させることになるだろう。すべての国のより若い世代が、発展への平和的な道をたどると固く決心した成人になるように、われわれは特に望むものである。また、われわれはまた、南京、広島及び世界中の他の無数の場所における、自然環境と何百万もの罪なき人命を損なった戦争の悲劇を避けることを、強く望むものである。

(翻訳：奥本京子)